

伊勢市国際交流だより

Φ Ι Λ Ο Σ

Φ Ι Λ Ο Σ 「フィロス」はギリシャ語で友情・友達の意

第43号

平成17（2005）年10月発行

伊勢市国際交流協会

TEL 0596-21-5549

FAX 0596-21-5522

新しい季節に向けて

会長 岩本 忠

伊勢市と近隣町村との合併にともない、それと深い協働関係にある私たち伊勢市国際交流協会も、新市域全体に向けた活動展開をすることになります。

1991（平成3）年1月の創設以来、協会の活動は活発で、実に様々な分野でおこなわれてきました。普通、国際交流といえば、通訳、翻訳、人物交流への対応程度の認識でありましたが、世の中はすでに「共生の時代」にあり、市内での日常生活における交友・共助が現実となってきました。特筆すべきは「世界の料理」、「日本語教室」、「医療機関での補助通訳」等であります。当然、機関誌発行や総会、役員会の開催も規則的におこなわれてきました。

当協会の発足は三重県でも初期の段階で、お互いが未経験なうえに、このような複合活動態勢を調整することになります。それには、実質、運営委員会を中心にしてそれぞれの活動の方針と内容を検討して進めるという形をとってきました。自分と違った活動の内容を知り、随分と論議を重ねてきました。この歳月の経過のうちに、会員の皆さんは今や国際協会を「わがこと」のように思い、責任と誇りをもって活動するようになっています。

国際交流は「異質文化の交流」です。違った環境・境遇の人たちとの交流には「相手を理解しあう心」が求められます。自己利益や自己主張の多い世の中に、これは尊い心がけであります。

この「国際的ところ」こそがまた、私たちの国際交流協会の精神であり、会員の皆さんは十分にそれを心得て、楽しみながら交流を進めています。これまでの数多くの実績と「国際的ところ」という理念を大切にして、新市発足と来春の記念会にむけて、新しい仲間を迎えた国際交流協会でありたいと思います。

このときに当たり、会の活動と運営に協力して下さいました方々に御礼を申し上げます。

世界の料理パーティと共に歩んで

ボランティア運営委員会副委員長 中山長子

第 58 回世界の料理パーティ“中国とインドネシア”編を無事に終える事が出来ました。

1991 年の伊勢市国際交流協会発足と同時にボランティア運営委員会の活動の一つとしてこの料理パーティが始まり今日に至っています。近隣の外国の方にその国の家庭料理を教えていただき、一緒に食べて一緒に楽しむという集まりです。これまでに約 40 ヶ国の料理を学び延べ約 1,800 人の市民に参加していただきました。



私達がよく知っている世界の大きな国々から地球儀でしか見た事のない小さな国や日本の反対側の遠い国の人達とその国の料理に出会う事が出来ました。旧伊勢市としては最後になった昨日（平成 17 年 10 月 9 日）のパーティも中国の曾 暁亨さん、王 登利さんとインドネシアのゲデ・サテブさんにそれぞれのお国の料理を教えてもらい、それはそれは楽しいひと時を過ごす事が出来ました。お礼に皆で“上を向いて歩こう”と“赤とんぼ”を歌いおひらきとなりました。

スタッフをはじめ皆さんのお蔭でこの 15 年間いろいろの苦労もありましたが一度の事故もなくやってこられた事を心より感謝しています。

ふりかえれば、その度に異なる国の初対面の外国人の講師とおつきあいは勿論喜びではありましたが、時にはいろいろのハプニングもあり、なかなかスリリングな事件もありました。例えば、揃える食材の打ち合わせをした時にバングラデッシュの青年はある食材を日本語ではなかなか



表現が出来ず、私達も丸い？硬い？といろいろ質問しても何の事か理解できず、とうとう一緒にスーパーまで行ったら、何とそれは土生姜だった事！

また、当日の朝になって、ノルウェー人の講師が事情がありどうしても会場へ来る事が出来ないと知らされました。パニック寸前となりましたが、講師から電話で必死に料理の作り方を聞いて書き取り会場へ向かいました。そして、皆に事情を伝え、電話のレシピを頼りに見た事もない幻のノルウェー料理を作り上げるというはなれ業！もありました。おもしろいおこせば果てしなく思い出がよみがえります。

ともあれ料理は世界共通の言葉です。今朝まで全く知らない国の方とたった **2** 時間後にはみんなとても親しく慕わしくなっている！世界の片隅のこの伊勢の地で沢山の国を知り、その料理を共有出来た事はこのうえない喜びです。

料理ってほんとうに素晴らしい国際交流だと今あらためてかみしめています。

皆様どうもありがとうございました。



<中国・インドネシア料理>

海鮮水餃子と手羽先の赤ワイン煮

リンゴのデザート

インドネシアの温野菜サラダ“ガドガド”

日本語ボランティア養成講座 2005 を受講して

片山 黎

9月3日(土)、4日(日)の両日。定員以上の盛況でした。このいせ日本語教室も発足当初は数名のボランティアと10名前後の学習者で、あれこれ模索の状態でした。その後、若い人達の参加のおかげで努力の積み上げと相まって現在の盛況を目の当たりにして感銘深い2日間でした。

教える側として大切なことは、人と人との交流を通して、これも共生のための一つの共有財産として、相手の立場に立ってこそ、初めて効果的指導を通じた交流も実現できるのだ、と改めて教える側の根本的な態度の重要性を強調された各講師先生の問題提起の中から各自が考えていけば、益々この教室の努力活動が実のあるものになるだろうと確信します。

当日の日程については資料に詳しく記載されているのでここでは割愛しますが、第一日

目：午前の藤本先生（伊賀日本語の会代表、みえにほんごネットワーク代表、三重大人文学部常勤講師）の「ボランティアとして知っておきたい基礎知識」で、先生の御説「ボランティアの困ったさん」（フィロス No.41 号参照）の諸例を心に、教える側としての基本姿勢の再確認を示された思いでした。午後の三上先生（生きた日本語、ありのままの日本を伝えたいと兵庫ボランティアチームのメンバーとしてこの道に数年来のご活躍）が模擬授業と教案の作り方の教示。第二日目：午前中は駒田先生（現在南山大、外国人留学生への日本語担当講師として、また、日本語教師養成で活躍）から「外国人の学ぶ日本語文法」では、動詞の活用形の順、「辞書形」から「て形」、「が」と「は」、微妙なニュアンスを持つ「など」「なんて」「なんか」等についてのお話。私達が学んだ国文法は説明や解釈のためであって、新しく文を作り出すには役に立たない。外国語としてみる立場から考えることが必要だと痛感しました。午後は八木先生（伊勢市で「NPO日本語塾ゆうごう」代表として外国語としての日本語教育指導に活躍）が具体的に授業を進めるのに有効な教材教具の利用について「身近なものをもものを使っての効果的授業を示され、後半では 5 グループに別れて各自の意見を交換し、最後に「まとめ」として報告で終了しました。私たちのグループでは「こーそーあ」の感覚が「I-You-He/She/It」と対比できるのでは、との結果に至ったのは私個人の思いでありました、、以上、思いつくままの参加所感といたします。



<講師の話を熱心に聞いている受講者の皆さん>

私の国際交流とその理解

国際交流協会の一員として

三宅 春子

今年の夏は例年に無く自然災害による大きな被害を国内外に生じ、今も尚その傷跡を残しております。九月中旬を過ぎる残暑の中で鳴くツクツクボウシの声を耳にして、やっと秋らしい風情を感じるこのごろです。国際交流協会の日本語教室では、外国人のために活動

する教室として、**1996年6月**に立ち上げ開設されたことが、保管書物に印されています。



の間時代の流れはさまざまな移り変わりがありました。私が日本語教室に協会員として入会ボランティア活動を始めたのは**1999年4月**でした。当時の事を思い起こし懐かしさがよみがえり、新鮮な感じさえいたします。

最初に使った教本は文化初級ⅠⅡ、次に、しんにほんごの基礎ⅠⅡ、そして現在は、みんなの日本語ⅠⅡとプラス・アルファ等々学習者に適した教本を選択し、教材においても、絵カード、マップ、写真、雑誌、

広告等、その他自作品を持参し対応しています。年々学習者も増加し、嬉しい次第です。教室も賑やかで活気に満ち楽しさ一杯で、交流もよい雰囲気で行われています。反面、学習者のレベルアップも目ざましく、教える側にも高度なアドバイスが求められます。ここに至るまでには、毎年日本語ボランティア養成講座が開催されています。ボランティアはこれが第一歩です。今年**9月3日、4日**の両日、伊勢商工会議所**4階**で行われました。第一日目は、日本語ボランティアが知っておきたい予備知識をテーマに、ボランティアで日本語を教えること、「ボランティア」とは何か、慈悲、人助け、奉仕、サービス？行政の補助。手助け？無償？「ボランティア」は自由な意思で参加する。個々人が自分で問題を見つけ出し、その問題に進んで取り組む活動、そしてその行動には責任が伴う。「ボランティアだから、日本語教育の専門知識は必要が無いのか」と外国人に関わる意味を考える。

私にとっては、日本語を教えるだけの日本語ボランティアというより多文化共生時代の担い手としての基本的なことを学ぶことができました。おかげで日本語教室に愛着を感じるようになってきました。学習者をサポートするに当たっては、国際的なイベントには参加し、多くの国を知る、人との出会い、触れ合いを大事に、そして何よりも自分を知ることの大切さに気づき、今までの外国訪問や国際交流会にも参加できたことの意義を痛感しています。これからも許す限り色々な国を訪れ、国際交流の場を広め、互いに国を知り、愛し、人とのかかわりを深め、ホットな気持を伝えたいと思っております。日本国、三重県、伊勢の素晴らしいところを語り継ぎ、国際交流に生かしたいと思っております。これからはいせ日本語教室でも明るく開かれた雰囲気の中で、皆が分け隔てなく共に学習と国際交流の憩いの場であればと思っています。

なお一層いせ日本語教室、国際交流協会の名に恥じないよう努力を積みしたいと思います。



中国を訪ねて

喜多 宏

昨今の日中関係は、何かぎくしゃくしている様に思われます。難しい両国の間の問題は別としても、個人レベルの交流ではそのようなことは、到底感じられません。と言っても、私の訪中はもう 10 年近くも前のことですが、その後、最近まで一人の少女との文通は続いています。

私は過去 3 回「日中共同桜友誼林保存協会」(本部は鈴鹿市)の訪中団の一員として、彼の地に出かけました。その経験を通して、感じたこと、考えさせられたことなどを次に記します。

第 1 回目 第 9 次訪中 (1996 年) (平成 8. 4. 19～ 4. 25)

第 2 回目 第 10 次訪中 (1997 年) (平成 9. 4. 17～ 4. 23)

第 3 回目 第 13 次訪中 (2000 年) (平成 12. 4. 10～ 4. 16)

第 1 回目ではまず、言葉の壁にぶつかりました。私がかねてより中国語を学びたいと思っていました。これを機会に、帰国後早速ラジオとテレビの「中国語講座」を受講することにしました。毎日、中国語を聞くことからはじめたものの、なかなか根気の要ることです。留守になる日は、家人に録音してもらったりしながら、とにかく続けてきました。

第 1 回目の訪問地の無錫で、小学 5 年生の少女薛斯雯に出会わなかったら、ペアになって桜の苗木を植え<土かけ水かけ>をしな



薛斯雯と共に (H8. 4. 23)

かったら、そして文通を始めなかったら考えると、まったく不思議なめぐり合いと言う他ありません。

その少女も今では大学生。初めは中国語でしたから、『中日辞典』『中日辞書』などと首っ引きでした。そのうち、英語混じりとなり、やがて英語のみとなりました。その間、彼女の語学力はぐんぐん伸びて、こちらが息切れしそうになりました。交流はもちろん家族ぐるみ、お互いに安否を気遣う間柄です。



彼女の家庭を訪問 (H10. 4. 12)

第 3 回目の折には、彼女の家に招かれ歓待を受けました。両親とも公務員で子供一人の理想的な一家ですが、決して贅沢ではなく地方都市の知識階級の典型と言えるでしょう。会

話もスムーズとはゆきませんでした。互いの信頼関係と彼女の手助けで、どうにか目的を果たすことができました。帰りには別れが惜しまれて、国境を越えて理解しあえた喜びで胸がいっぱいでした。

そののち訪れたワシントン、ポトマック河畔の桜は、日本で見るのよりいちだんと艶やかでした。

無錫の数百本の友誼の桜林も、それに勝るとも劣らないことを実感したのでした。

アウシュビッツ 人間の狂気を見て

藤原 道子

ポーランドの古都、クラクフの西54 Kmにオシフィエンチムと言う、小さな町・・・ドイツ名「アウシュビッツ」・・・がある。

一人旅の途中、1日ツアーでここを訪れる機会を得た。ツアーは18名、ほとんどがアメリカ人だった。米ドルで\$40支払い、朝9時のバスで、クラクフのホテルを出発。1時間半ほどでアウシュビッツ強制収容所に到着した。第二次大戦中、ナチスドイツ占領下の土地からユダヤ人、共産主義者、反ナチス活動家、同性愛者などが捕らえられ、各地の強制収容所に送られた。あるものは即座に殺され、また過酷な労働の後、殺された。アウシュビッツ収容所で、殺された人々の数は、28民族、400万人と言われている。

駐車場に着き、サービスセンターで説明を聞く。ここにはインフォメーションがあり、資料やガイドブックを売っている。そこから順路の標識に従って進む。収容所内は28棟の囚人棟があり、そこは収容者から没収した生活用品などが公開されていた。おびただしい数の衣服、トランク、靴、眼鏡など、トランクには名前や住所が書いてあるものもある。人間の髪の毛で織られた、カーペットなどの敷物が展示されている部屋もあった。この後、ガス室に向う。教室より少し広いぐらいで、天井は低く、薄暗かった。チクロンBという毒ガスは、室内温度が上がった方が効力が高まるということで、囚人を全員裸にし、ぎゅうぎゅう詰めにして、人いきれで室温が上がったところで、チクロンBを投入したという。ガス室の出口の近くに、絞首台があった。アウシュビッツ初代所長ルドルフ・ヘスが処刑されたところで、展示物として今も残っている。

アウシュビッツ強制収容所から約2km離れたところに、さらに大規模なビルケナウ強制収容所がある。「死の門」と呼ばれた入り口をくぐって中に入ると、広大な敷地に点々と木造のバラックが建っている。中には内部が当時のまま保存されているものもある。何棟か中を見て説明を受ける。この収容所には、収容者の食事の施設がない。それとトイレが何棟かに1棟あり、みんな並んで1日3回だけ使用できる。見ることはできなかったが、ビルケナウにはアウシュビッツのガス室より規模の大きいものが4室建っていたという。

私は戦争の怖さより人間の愚かさとむなしさそして狂気を感じた。気がつくと午後2時、胸のあたりが重々しく、昼食をとることができなかった。ツアー客のアメリカ人もヘビー

「重い」とか言って食べていないようだった。

重い1日だった、けれど私にとって、戦争と平和、愚かさと狂気、を心に刻んだ大きな1日だった。

編集後記

衆院解散・総選挙での圧勝と小泉内閣の続投の今、主権者たる国民の一個人として、ふと半世紀の昔、創設されたPHP研究所の30周年記念出版「私の夢・日本の夢・二十一世紀の日本」(松下幸之助著)の所説を思い起こさせられた。「これは単なる未来予測でなく、こうありたい、そしてこういう社会を実現すべきだとの理想像である」と。そこでは2010年初頭、国際機関の大規模な世論調査で圧倒的一位となった理想国家『日本』の姿が四カ国代表からなる視察団への報告の形で示された。1. 物価を下げるには各方面に潜むムダを徹底的に排除する。2. 企業経営には蓄積のためのダム経営を。3. 内閣から教育府を独立させ、自他相受の人間育成を目指す義務教育、そして宗教と教育の共生。4. 国土環境問題・バランスの取れた開発、自給自足のための食料ダム作り、5. 党利に走らぬ弔堂精神に生きる政治家、6. 国民総意による自衛安全を図る平和国家。以上がすでに実現し、もしくは努力中のものである。

最後に若き首相からの全国民へ放送のスピーチで締めくくられた。1. 新しい人間観の確立(衆知を集め正道を歩めば物心調和のある繁栄を実現し得るほどの偉大なる存在としての人類)。2. 日本人としての自覚(独善を排し和を貴び乍らも主体性を失わず)。3. 国民共通の国家目標を持つことの重要性の訴え。以上の言葉のとおり、よりよき日本、否、世界の実現の責任が各個人に課せられたと痛感する日本国民であった。

以上が松下幸之助氏の理想の骨格であると把握したところです。

(文責 編集委員)

編集委員： 池山、片山、喜多、竹中

顧問： 岩本

フィロス創刊号(‘91.9.10)

